Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-08-03

重訳の再評価の試み－ベトナムにおける日本文学の重訳を中心に－

NGUYEN THANH TAM

(Degree)
博士（学術）

(Date of Degree)
2016-03-25

(Date of Publication)
2017-03-01

(Resource Type)
doctoral thesis

(Report Number)
甲第6554号

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006554

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

（別紙様式３）

論　文　要　旨

氏　名　NGUYEN THANH TAM
専　攻　グローバル文化専攻・
指導教員氏名　藤濤文子　教授

論文題目（外国語の場合は必ず日本語訳を併記すること）

「重訳の再評価の試み―ベトナムにおける日本文学の重訳を中心に―」

論文要旨

ある言語・文化で生まれた文学は翻訳を通じて、異文化・異言語の世界に伝わり、新しい命が生まれていく。古代ギリシャ語の『イーリア』やペルシャ語の『千一夜物語』といった古典から、近代の村上春樹の作品などは翻訳・重訳によって、故郷の境を越え、世界の至るところで読まれている。翻訳の功績が認められることがある反面、翻訳はただ原文の「劣った複製」であり、更に重訳すなわち媒介の翻訳を介した間接翻訳は「更に劣った複製」であるという考えも存在する。その結果、重訳は長い間学問的に取り上げられる事はなかった。だが、そうした主張を突き詰めれば常に原文で読めるようにすべきであり、同様に、あらゆる言語の原文から直接に訳さなければならないという主張になるだろう。しかしそれは極端過ぎ明らかに実現不可能であり、今後の言語・文学の交流・伝播に有利なあり様ではない。従来の考え方を越えて、「重訳」という現象に新しい角度から光を当てることにより、新しい学術のみならず翻訳の実用に役に立つ発見につながると考える。

重訳（Indirect Translation／Relay）は、直接翻訳より劣位のものと見なされることがあるが、直接翻訳が困難なときに行われてきたものであり、その意義と役割を否定することはできない。また、重訳を考慮せずには翻訳史は考えられないため、近年注目を浴びる領域になりつつある。重訳を通じて、かつてのベトナムと日本のような複雑な関係にあった国家間でも、文化・文学交流が確実に行えるようになった。ベトナムは中国文化に千年あまり強い影響を受けてきており、19 世紀から 20 世紀前半のフランスによる植民地化の時期を経て、対仏・対米の戦争により独立を得て、現在は社会主義のもとで改革開放の政策を進めている。こうした変動の多い歴史的背景によって、ベトナム・日本の交流関係には妨げが多く、何度か中断されたため、日本文学の翻訳が 20 世紀の初頭に始まったとは言え、実態は時代により不安定で大きく変化してきた。それにつれ、ベトナムにおける日本文学は、時代ごとに異なる媒介言語を用いて重訳され、政治や思想の影響で翻訳する作品に偏りが出るなど、非常に特殊な展開を示している。1990 年代までのベトナムには、訳された日本文学のほぼ 9 割が英語やロシア語などを介した重訳であったことは歴史的事実であり、重訳が大変重要な役割を演じていたことは明らかである。このように、重訳は否定的側面だけではなく、異文化を伝える上で有効な手段として、より客観的に再評価することが必要であると思われる。

そこで本博士論文では、重訳という現象を解明するために、ベトナムにおける日本文学の重訳のケースを、歴史的経緯と関連づけ、時代背景に応じて日本文学の翻訳・重訳の役割・変動を論述することとする。本論文では、まず先行研究を踏まえ、重訳の定義・用語を整理する。更に、文学の重訳に対する否定的評価及び肯定的な意見を取り上げ、重訳の問題点を確認する。

重訳の諸相を究明するに当たり、歴史や社会思考という様々なシステムの制約や、広い文脈を考慮する翻訳理論のポリシステム理論の応用を試みる。具体的にポリシステム理論を運用し、ベトナムの歴史的背景や社会的制約が、ベトナムの翻訳史における日本文学の翻訳の位置づけに及ぼした影響を考察する。それを踏まえて、日本文学の重訳を 1913 年～1944 年、1945 年～1974 年、1975 年～2001 年及び 2002 年～現在という 4 つの主な時期に分け、それぞれの時期の歴史的背景を辿りながら、重訳を中心に日本文学の翻訳事情を論述する。

ベトナムの日本文学の実情に基づいて、異文化理解の観点から、翻訳と重訳の本質を見直す。翻訳する際に、翻訳者はどの立場に立つか、即ち起点言語か目標言語かいずれの文化の視点に立って訳すかにより、翻訳方略も変化する。また、起点テクスト（Source Text: ST）・媒介翻訳（Mediating Text: MT）・目標テクスト（Target Text: TT）という三視点の関係に着目して、重訳の新たな分類法を提案し、二・三視点の重訳、三視点対照の重訳・翻訳のモデルを導入する。そこで重訳のメリットを活用できる三視点対照の翻訳法という訳出法では、ST と MT という二つの参照点があるため、TT の質がかなり補正でき、他の種類の重訳より優越する可能性を示す。日本文学のベトナム語版の実例分析により、確認できた（通常の）重訳の問題点は、異文化を解釈して表現する時の誤解や訳漏れ・誤訳である。これらの問題を改善するのに、三視点対照の翻訳法が有効であることを示した。ただ、重訳に対する認知度がまだ低いことにより、情報公開や翻訳権・著作権の実行という障壁が存在している。これは重訳について、今後の研究により、重訳に潜在している様々な可能性、豊かなポテンシャルを明確にし、重訳の可能性が広がることを期待できるだろう。

[課程博士用]

論文審査の結果の要旨

氏　　名	NGUYEN THANH TAM		
論 文 題 目	重訳の再評価の試み ―ベトナムにおける日本文学の重訳を中心に―		
判　　定	合　格 ・ 不 合 格		
論文チェックソフトによる確　認	☑ 確認 ☐ 未確認　理由：		
審査委員	区　分	職　名	氏　　名
	委 員 長	教授	米本　弘一
	委　員	教授	遠田　勝
	委　員	教授	藤濤　文子
	委　員		印
	委　員		印

要　　旨

本論文は、ベトナムにおける日本文学の重訳を糸口に、これまで学問的に注目されてこなかった文学の重訳の諸相を明らかにしたものである。重訳は歴史上、頻繁になされたものであり、その文化史に果たした役割はきわめて大きいものである。さらにグローバル化が進む現代においても重訳の存在は消えることなく、その現代的意義が増している。しかし原文からの直接翻訳に比べてレベルが低いとされ、学問的な研究対象として扱われることは稀であった。

本研究では、文学の重訳をテーマとして、次の研究目的を掲げている。まずベトナムにおける日本文学の翻訳を歴史的に辿り、重訳の果たした役割を確認するとともに、社会・文化的状況との関連付けを明確に示すこと、次に重訳の形式と特徴を明らかにすること、さらに、重訳の現代的意義と活用の可能性を明確化すること、である。研究方法としては、一次資料、二次資料の収集と分析にアンケート調査とインタビュー調査を取り入れている。

第１章の序論で研究の背景と目的、方法を述べ、第２章で先行研究における重訳の定義と用語を確認した上で、文学の重訳に対する否定的評価と肯定的意見を取り上げ、重訳の問題点を整理している。第３章で、ベトナムの文学史において翻訳が中心的な役割を果たしたことを、ポリシステム理論に基づいて説明している。すなわち、中国からの支配期（紀元前１世紀～937 年）を経て、独立後（938 年～19 世紀半ば）も漢字および中国文学の影響が続き、フランスの植民地となった 19 世紀に西洋文化が持ち込まれたという歴史をもつベトナムでは、その文学の歴史は翻訳文学の歴史であったこと、そのような歴史的背景と社会的制約により、日本文学の翻訳も中国語、フランス語、ロシア語、英語からの重訳の歴史であったことを明確化した。第４章では、ベトナムにおける日本文学の翻訳事情を、４つの時期（1913 年～1944 年、1945 年～1974 年、1975 年～2001 年及び 2002 年～現在）に分けて、歴史的背景を辿りながら詳述している。基礎データとして日本文学翻訳の作品一覧表を作成し、それに基づき 2001 年までは圧倒的に重訳の割合が多かったことを示した。重訳現象の実例を踏まえて、第 5 章では、重訳においては、原文と翻訳という二者間の関係だけでなく、媒介翻訳という第三の要素を入れた三者間の関係となる点に着目し、異文化理解という観点から、重訳の新たな分類法を提案している。すなわち媒介翻訳から間接的に訳す通常の重訳を、間接翻訳の数に応じて「二視点の重訳」「三視点の重訳」と捉える一方、それに原文参照を加えたものを「三視点対照の重訳」と命名している。これに、直接翻訳に媒介翻訳を参照するケース（「三視点対照の翻訳」と命名）を加えた「三視点対照の翻訳法」が、二視点しかない通常の重訳の問題点を改善するのに有用であるだけでなく、さらに直接翻訳より優越する可能性があることを示唆した。続く第６章では、この重訳を用いた三視点対照の翻訳法の有効性について、日本文学のベトナム語翻訳の実例で、通常の重訳版、直接翻訳版、三視点対照の翻訳版を比較検討することにより、例証している。第７章では、重訳が異文化理解を助けるという利点を潜在的に持っている点を反映する新たな定義（「重訳とは翻訳者（または出版社等の翻訳の関与者）の意識的な選択であり、多文化・多言語を操作する翻訳方法である。重訳のプロセスの中には潜在的働きとして、起点テクスト(ST)と媒介テクスト(MT)のテクスト・文化の三視点対照により、異文化の客観的理解を補助する効果がある」）を提案している。さらに、重訳の現実的な面として、出版社が重訳であることや間接翻訳の参照について明記しないといった、情報公開と著作権の問題にも触れている。第８章の結論では、本論文が重訳の諸相を解明し、重訳に対する偏見を学問的に排除しようと努めたこと、異文化理解という観点から重訳を捉えなおして、重訳の新たな定義と分類法を提案し、重訳を利用した三視点対照の翻訳法の有効性を理論的に実証したこと、世界の多くの周辺言語からの翻訳、周辺言語への翻訳に適用可能であること、の三点を本論文の意義としてまとめている。さらに、重訳に潜在する豊かな可能性に触れて、今後の研究課題への展望についても明確に述べられている。なお、本博士論文に関連する査読付き投稿論文４編、口頭発表９回（うち海外３件）、ポスター発表１回（海外）という実績を積んでいる。

本研究は、ベトナムにおける日本文学翻訳の分析と共に、文学の重訳の歴史的役割と現代的意義、およびその活用の可能性を研究したものであり、重訳の再評価について重要な知見を得たものとして価値ある集積であると認める。よって、学位申請者の NGUYEN THANH TAM は、博士（学術）の学位を得る資格があると認める。